

10月23日は、二十四節気の一つ「霜降(そうこう)」でした。霜降とは、「寒さが増し、そろそろ冬服が欲しくなるころで、草木も枯れてくる。万物が冬支度にいそしむ時期」だそうです。露(つゆ)が凍って霜(しも)に変わり始める頃といわれています。まだ霜は見えていませんが吹く風や降る雨からも、秋の深まりとともに冬が近づいてきたのを感じます。

読書の秋 本に親しんでみませんか

「大きな袋を肩にかけ、」この一節で始まる歌唱「だいこくさま」とは大国主(おおくにぬし)大神のことです。古事記を読んだことがある人は少ないと思いますが、古事記の第3話「オオクニヌシ」第2章に出てくるイナバの白ウサギの話は、鳥取県に住む私たちにとっては馴染みのあるお話です。隠岐の島にいたウサギがワニ(サメ)を騙し、全身の毛をむしられて泣いていたのを、大国主大神に助けられるというお話です。

だいこくさまの大きな袋の中には、何が入っていたかという八十神(やそがみ)と言われる大勢の兄神が、因幡の国に住む美しい八上比売(やがみひめ)に会うための旅の荷物でした。

兄神の荷物を一人で背負い、行列の最後尾を遅れながら歩いていた大国主は、気多(気高)の海岸で白ウサギに出会います。兄神たちに、毛をむしられた体を海水で洗い潮風で乾かすように言われ、痛くて泣いていたのです。大国主大神に助けられた白ウサギは、「八上比売(やがみひめ)は、あなた様と結ばれるでしょう」と予言をします。八上比売(やがみひめ)は兄神たちではなく予言通り大国主と結婚します。2人は幸せに暮らしたとき。めでたし、めでたし。で実はこの話は終わらないのです。怒った兄神たちは策略をしかけ、大国主には次から次へと大変な試練が待ち構えているのです。

県外の出張の際にはカバンに本を入れていくようにしています。以前に行った東北出張の時、移動の時間に読んだ本のお話です。

羽合小学校では、子どもたちの読書活動を推進しています。朝読書では、10分間という短い時間ですが、静かに自分の選んだ本を読んでいます。朝の図書館はたくさんの子どもたちが本を返したり、新しい本を選んだりしています。低中学年では年間100冊、高学年では80冊以上読むことを目標にしています。高学年にとっては高い目標だとは思いますが、是非とも挑戦してもらいたい。子どもたちにはたくさんの本を読んでほしいと思っています。本を読むことによって、子どもたちの心の中に新しい世界が広がり、経験したことのない世界に浸り、疑似体験をすることができます。また、集中力や想像力が広がり、本校の教育目標に掲げている「やさしい子」「かしこい子」につながると考えています。

毎日忙しく、からだのゆとり、心のゆとりがなかなかもてないというのが本当のところだとは思いますが、私たち大人も読書に親しんでみてはどうでしょう。秋の夜長、今晚、どんな本を読もうかと考えたり、読んでいる本をお子さんに話したり、お子さんの読んでいる本と一緒に読んでお話しするのも楽しいと思います。

